

印度學佛教學研究

第七十卷 第二号

[通卷第 156 号]

令和 4 年 3 月

日本印度学仏教学会

『正法眼蔵』の漢訳者、陸鉞巖

石井 公成

はじめに

陸鉞巖 (1855-1937) は、駒澤大学の前身である曹洞宗大学林在学中に、道元の男女平等論に基づいて尼僧学校の設立を提唱、卒業後は井上円了の哲学館で学び、曹洞宗中学林で教え、自坊で坐禅の指導に励んだ。台湾布教師となって布教と教育に努め、インド・東南アジア・中国を視察し、帰国後は騒動で休校となっていた曹洞宗大学林の総監心得となって復旧させた。名古屋の円通寺住職となり、その復興と坐禅指導に努めるかたわら、『正法眼蔵』『正法眼蔵随聞記』『光明蔵三昧』『伝光録』『曹洞教会修証義』その他、曹洞宗の重要文献を次々に漢訳した。

このように、鉞巖はきわめて興味深い人物であって重要な仕事をしておりながら知られておらず、明治・大正以来、人物名鑑の類が1~2頁で紹介しているにすぎない。戦後、その漢訳に注目したのは、William A. Bodiford 氏が氏の『伝光録』の英訳の序論において、本書を開版した仏洲仙英 (1794-1864) の法孫である鉞巖の『伝光録』の漢訳、『伝光録布鼓』に含まれる注記は、『伝光録』の諸テキストに対する仙英の注記に基づいているように見るとし、横関了胤がいくつかの語句については鉞巖の漢訳の方が原文より理解しやすいと述べたことを紹介しているのが唯一の例だろう¹⁾。鉞巖の生涯と著作について簡単に紹介しているのは、台湾の国立成功大学博士課程に在学中の黒羽夏彦氏が、「ふおるもさん・ぶろむなあと」と題するブログにおいて、2019年4月1日に公開した「【研究メモ】日本統治時代初期台南に来た曹洞宗僧侶・陸鉞巖」の記事²⁾ だけであり、鉞巖の思想や漢訳に関する詳細な検討はこれまでなされたことがない。

駒澤大学図書館には、円通寺が刊行した上記の著作と、手書きの原稿と校正本が多数寄贈されて残されている。しかし、これまで注意されておらず、『正法眼蔵布鼓』は『正法眼蔵蒐書大成』にも収録されていない。本稿では、鉞巖の生涯と著作を紹介し、なぜ『正法眼蔵』の漢訳に取り組んだかを明らかにしたい³⁾。

経歴と著作

鉞巖自身が自らの経歴について詳細に述べた文章は見当たらないため、生涯については、人物名鑑の類⁴⁾、曹洞宗の『宗報』、『台湾日日新聞』、『宗教時報』、『通俗新聞』その他の雑誌記事、鉞巖の著作その他に基づいて述べていく。

陸鉞巖は、号は仙雄。安政2年（1855）2月8日、名古屋に生まれた。文久元年（1861）に同地の曹洞宗寺院、桃岩寺僊玉によって得度、僊玉の兄弟弟子である仙受が倉吉の満正寺の住職となったため、明治4年（1871）に同寺に掛錫した。仙受が熊本の東向寺に移ると随侍し、明治8年（1875）の冬に立職、仙受の法を嗣いだ。仙受は、井伊直弼を指導して開国の決意を固めさせ、また瑩山の『伝光録』を重視して開版したことで名高い仏洲仙英（1794-1864）の弟子であり、自ら「禪定回復翁」と称したほどの師家だった⁵⁾。鉞巖が師のそうした姿勢を受け継いだことは、明治26年（1893）刊の山岸安次郎『洞上高僧月旦』では、鉞巖は「禪定回復翁の一子たるに負かず」と評され、将来、本山貫主となって宗門を統治すべきは鉞巖師以外にないと評されていることから知られる⁶⁾。

明治9年（1876）、神戸福昌寺の能仁柏巖（?-1882）に教相を学ぶ。柏巖は、後にクリスチャンの高橋吾郎『仏道新論』の仏教批判に反発し、『霧海南針』（1881年）を著して反論しているが、伝統仏教学の枠を超えないと評されている⁷⁾。この後、名古屋に戻り、佐藤牧山（1801-1891）に和漢の学を学んだ。牧山は尾張藩が江戸に置いた弘道館の総裁を務め、尾張に戻って藩校である明倫堂教授となり、廃藩後は私塾で教えた。儒教や老荘を折衷した幅広い学風であって、『老子講義』『中庸講義』『周易講義』『清朝史略』などで知られる。

明治16年（1883）に、前年に創立された曹洞宗大学林に入学⁸⁾。同年9月、岐阜東漸寺住職となった。大学林在学中に曹洞宗系の『東洋宗教新聞』第1号（施檀舎、1885年10月10日）に「尼僧学校設立論」（12-14頁）を寄稿。『正法眼蔵』の礼拝得髓巻が説く男女平等論に触れつつ尼僧学校設立の必要性を説いている⁹⁾。

明治19年（1886）2月、岐阜の龍雲寺住職となる。この年、曹洞宗大学林を卒業し、研究生に特選された。研究生とは、教頭などの指示のもとで学生を教える立場とされている。陸鉞巖『冠註 普勸坐禅儀・坐禅用心記（合本）』（曹洞宗大学林蔵版、鴻盟社）がこの年の3月に刊行されているのは、その教材として使うためのだろう。同書はすべて漢文で訓点が付付けられており、冠註で引く『正法眼蔵』『伝光録』の文も漢訳されている。ただ、『正法眼蔵』の引用は道元の『普勸坐禅儀』

の冠註部分には見えず、瑩山の『坐禅用心記』の冠註部分に、弁道話、光明卷（原文の漢文のまま）、道得卷、如来全身卷、袈裟功德卷の文が引かれている。漢訳しやすい部分が多いように見え、これは『伝光録』の引用についても同様だ。

明治20年（1887）には、井上円了が創設して9月に開校した哲学館に入学し、明治23年（1890）まで在学、同年に曹洞宗中学林教授となった。

明治29年（1896）、台湾布教師を命じられ、7月に台北に設置された曹洞宗宗務局において教務監督となって布教と調査を開始。11月29日に従者1名を連れて全島の踏査に赴き、翌年1月15日に台北に戻ってその報告「台湾島視察書」を宗務局に提出、『宗報』第7号（1897年4月）に掲載された。踏査に赴く前に執筆し、『台湾日日新聞』の明治29年11月26日号に掲載された「台湾と仏教」では、台湾の宗教の柱は仏教であるため、「大日本の治下に風化せしめん」とするには仏教によるほかに、日本僧の職分は布教のみにとどまらないことを強調している。

明治30年に台南・安平・嘉義の担当を命じられて3月に着任。先に着任し、台湾語の学習に努めていた若生国栄・芳川雄悟が始めた国語（日本語）教育を進め、台南寺を創設して布教に努めるとともに国語学校、夜間学校、土語（台湾語）学校を創立、設備・教育は台湾有数と評された。裁縫学校、婦人協会も開き、台湾人と日本人の教化に励み、禅学会には知事・旅団長なども参集した。不品行な者もいた諸宗の布教師の中で、鉞巖は人格高潔で学問があるとして日本側からも台湾側からも評価され、信徒が増えていった¹⁰⁾。

明治32年（1899）9月に出発し、中国南部・セイロン・インド・ビルマ・シンガポールなどを調査¹¹⁾。セイロンでは「靈知会（神智学）」の建物に滞在し、ダルマパーラ居士の世話になり、スマンガラ長老などと面会している¹²⁾。「入竺道人 陸鉞巖」と記した「印度仏蹟参拝記」（『通俗仏教』第3巻第1号、1901年、51-53頁）では、セイロンでは僧が信徒の家におもむいても読経は多くせず、三帰・五戒を授けることを特筆している。鉞巖はこうした南方仏教のあり方を晩年に至るまで尊重していた。

明治33年（1900）9月に帰国し、前年の学生の教頭・学監への不信任騒動により閉鎖されていた曹洞宗大学林の総監心得に就任、大森知言が教授、開明派の大森禅戒が学監となり、「巖に失せず、寛に流れざる程度において教授を始め」¹³⁾てこれを復旧した。一方で、10月には仙受の後を受けて円通寺二十八世となっているため、いつまで実務を担当したか不明だ。

明治34年（1901）には曹洞宗議会議員に特選任命され、ついで永平寺出張所副

監院・監査部長に任命される。明治35年（1902）に師家認可を受けた。曹洞宗大学林を退いてからは、自坊で雲衲の育成に励み、模範的僧堂と称されるに至った。明治41年（1908）に刊行した『陸禪話』（円通寺）では、「傲慢、龐行、一種の禪病に墮し居る者」を批判し、曹洞禪は「綿密」であるべきことを説いている。

大正5年（1916）には、日置黙仙禪師の晋院を慶祝するため、『漢訳曹洞教会修証義』と懷葬『光明三昧』の漢訳である『光明三昧布鼓』を円通寺認可僧堂から刊行。大正10年（1921）刊行の『正法眼蔵知津布鼓』の「後語」によれば、出版社から刊行せず、自ら書き、校正し、出資をつのって自坊で刊行して献上・配布するにとどめたのは、名誉のためでなく、一時期だけ歓迎される書物は万世不朽のものでないことを考慮してのことだという。これは、仙英が『伝光録』開版にあたって異本を調査し、版下を自ら浄書し、校正にもあたったこと、また弟子の俊昶が私財を投じて『参註』を刊行したことも一因となつていよう。

大正6年（1917）に『伝光録布鼓』を刊行。大正8年（1919）には朝鮮・満州・中国を訪れた。大正9年（1920）に『正法眼蔵布鼓』『仏祖正伝禪戒鈔布鼓』を刊行し、大正10年（1921）には『正法眼蔵随聞記布鼓』を刊行している。『随聞記布鼓』は、病気がちであって大正18年となる懷葬の650回忌までの生存が危ぶまれたため、「早計狂愚」⁴⁾と評されるのを承知で報恩のために準備を始めたという。

昭和2年（1927）、米国とヨーロッパを巡り、セイロン・中国経由の海路で帰国し、翌年、漢詩を多く含む『西航行脚記布鼓』を刊行。昭和3年（1928）に円通寺が専門僧堂として認可されると、僧俗の坐禪指導により力を入れた。これ以後の著作は、円通寺専門僧堂刊と記されている。昭和5年（1930）、出家して間もない僧のために基礎となる漢文文献の要所を訓読で示したほか、パーリ語の三帰依・五戒を片仮名表記で載せ、歴代天皇名の一覧や道元・瑩山の年譜などを付した『撥草初門布鼓』を刊行。昭和12年（1937）2月24日、82歳で逝去した。円通寺では三万円もの負債を返済して本堂を再建しており、再中興の祖と称されている。

駒澤大学図書館所蔵の著作・校正・原稿

所蔵されているのは、以下の通り。ほとんどは、「陸鉞巖師寄贈」ないし円通寺の寄贈と記されている。これまで触れていない著作のみ刊行年次を入れ、原稿や校正、刊行理由を述べた別紙などが付されている場合は、それも記しておく。

『冠註普勸坐禪儀坐禪用心記』、『陸禪話』、『漢訳曹洞教会修証義』、『光明藏三昧布鼓』（原稿・校正）、『伝光録布鼓』（原稿・校正）、『正法眼蔵布鼓』（原稿・校

正・別紙）、『禪戒鈔布鼓』（原稿・校正）、『正法眼蔵随聞記布鼓』（原稿・校正・別紙）、『承陽大師行状訂補建擲記布鼓』（1921年、原稿・校正）、『曹洞教会修証義筌蹄布鼓』（1921年、原稿・校正、瀧谷琢宗『曹洞教会修証義筌蹄』1893年の漢訳）、『永平正法眼蔵知津布鼓』（1921年、原稿、瀧谷琢宗『永平正法眼蔵頭開事考』1895年と福山黙童『日本曹洞宗名称考』1891年の漢訳）、『修道用心偈六百首布鼓』（1925年、原稿・校正）、『永平正法眼蔵知津布鼓』（1921年、原稿・校正）、『伝光録布鼓（訂補再版）』（1925年、原稿・校正）、『正法眼蔵摘旨韻文布鼓』（1926年）、『西航行脚記布鼓』、『撥草初門布鼓』、『伝灯歌疏布鼓』（1928年）、『緇衲指針布鼓』（1932年）、『伝道歌布鼓』（1934年）。

『正法眼蔵』漢訳の背景

『正法眼蔵』の漢訳で今日に伝わるのは、瞎道本光（1710-1773）が明和7年（1770）に完成させた『正法眼蔵却退一字参』（以下、『参註』）であり、本光の遺命により、弟子の甯天俊昶（?-1817）が1812年に私財で刊行した。明治初めにその版木が廃棄されそうになったため、青蔭雪鴻（1832-1885）および曹洞宗大学林創立に関して大きな働きをした瀧谷琢宗¹⁵⁾（1836-1897）が曹洞宗宗務庁に買いとらせて曹洞宗大学林に納め、明治16年（1883）に曹洞宗大学林専門学本校蔵版として刊行した。大学林在学中に琢宗からしばしばその話を聞いていた鉞巖は、刊行された『参註』の寄贈を受けたものの、当初から『参註』の漢文訳に不満だったようだ。

そのことは、大正5年（1916）に折本の形で刊行された『漢訳曹洞教会修証義』の「後語」に見えている。そこでは、『参註』は『正法眼蔵』の文章中の漢字を別の漢字に置き換えている場合があり、訳語が統一されておらず、助辞に注意していないため意味が通じない箇所がある、などの欠点を指摘している。ただ、おそらく「助撰者」によるものであろうとし、本光和尚の業績は不朽であるため、この『修証義』の漢訳では『参註』の漢訳を「補訳」するにとどめると述べる。そして、現在は「仏教禪風」が「西漸之秋」であるから、この漢訳によって「鮮支人」に僅かでも本証妙修の義に接してもらいたい、と述べている。

手伝った者の誤りというのは遠慮した表現であったことは、大正9年（1920）刊行の『正法眼蔵布鼓』に別紙として添えられた「正法眼蔵布鼓の次第」が『参註』の問題点を詳しく論じた後にそのことに触れ、「先達の徳を傷つくるを虞れてなり」（3頁）と明言している通りだ。ただ、『正法眼蔵布鼓』巻六の「後語」によれば、大学林在学中から『参註』の誤りの多さに気づいていたが、敢えて人に語ら

なかったという。以来、改訳しようと思いつきながら果たせず、大正2年10月に『伝光録』とともに取り組み始めた。両書を大正天皇の即位を慶祝して大札時に奉呈したいと願ったものの、大正4年（1915）秋の大札に間に合わず、『伝光録布鼓』は大正6年、難解で大部であるため、改稿7度に及んだ『正法眼蔵布鼓』は大正9年に完成し、宮中および両祖前に奉呈するほか、『鮮満支地』や国内の図書館・学校¹⁶⁾・名利に寄贈して読まれることを希望している。

鉞巖は『伝光録布鼓』と『正法眼蔵布鼓』は天覧、『禪戒鈔布鼓』は台覧の栄を得たとして恐懼していた。鉞巖は早い時期から「皇恩」と「仏祖の恩」、すなわち積尊と道元・瑩山の両祖の恩義に感謝しており、ほとんどの著作の後書きで、この漢訳はこれらの恩に僅かながらも報いようとしたものであると述べている。

中国・朝鮮の人々向けの漢訳の必要性を強く意識するようになったのは、台湾で布教するようになってからだろうが、その台湾に赴任した明治29年（1896）に、忽滑谷快天による『修証義』の英訳が鴻盟社から出版されたことも、大きな刺激となったろう。またその台湾滞在中の海外視察では中国にも寄っているうえ、セイロンで仏教を推進していた神智学の徒の国際的な宣伝活動を見聞したことも、漢訳の必要性を痛感させたことと思われる。『正法眼蔵随聞記布鼓』末尾に付された「『正法眼蔵随聞記』等、四部漢訳出版の畧理由」（1923年）では、近年になって『修証義』の英訳（忽滑谷快天訳、1896年）が出たのは慶賀すべきことであると、大正8年（1920）に中国に赴いた際、済南のキリスト教徒の私立博物館風な館に広東語・広西語・福建語・貴州語・雲南語・江西語・上海語・寧波語・満州語・時文・西藏語・蒙古語という12種の聖書が展示されているのを見たが、これを「他山の石」とすべきだと述べ、「西藏・安南・暹羅・緬甸・錫蘭・尼彼爾等各地各国語訳の必須」を説いている。鉞巖は、これによっていよいよ意を強めたのだ。

『参註』の問題点と鉞巖の漢訳の姿勢

『正法眼蔵布鼓』末尾に添付された「正法眼蔵布鼓の次第」では、『参註』の欠点を列挙し、「我流の漢文にて誤謬少なからず」と説く。ただ、宗内でよく見かける誤謬の例として、「傍若無人」は「若傍無人」の誤りと述べているのは適切でなく、『世説新語』その他の用例があることが示すように、鉞巖の指摘には鉞巖自身が誤っている場合も僅かに含まれている。次に『参註』は11ヶ月ほどで作成されており、冗長であって文も内容も精練しておらず、註も不十分とする。

ただ、「誤謬は誤謬として参本の拳は偉業なり……敬服の至り」と賞賛し、私財

によって刊行した甫天俊視の功も高く評価している。そして、自分自身は、『正法眼蔵布鼓』と『伝光録布鼓』に取り組んだ8年間、完成しないことを恐れてこの仕事を秘密とし、『正法眼蔵』の諸本や注釈類について質問されても語らなかったと述べ、本文を傷つけることを恐れ、義訳ではなく直訳を心がけたと説いている。

問題は、鉞巖が『正法眼蔵』の特色を理解していたかだ。『台湾日日新報』明治29年（1896）12月5日版の1面に掲載された「禪学研究論」では、鉞巖は、

禪宗の宗旨は一言以て之を云は、悟道を得ると云ふにあり悟道を得るとは自己の心源即ち万有の本体を坐禪工夫の力を以て徹見發明を為すと云ふ之を禪宗にて見性悟道又は豁然大悟等と云ふ……然りと雖も禪宗敢て経文を排斥して用ひずと云ふには非ず……（修行研鑽に努めれば）八風吹けども動ぜずと云ふ妙地に達するや必せり……（複雑となった世間の乱れ）此の際禪学の研究予は邦家の為に必須なるものと信ず。

と述べ、経文を排斥するのではないといった点は道元と一致するものの、「心源」の「徹見」を強調するなど、『正法眼蔵』の主張とは異なる禪宗一般の見方を説いており、道元が偽作として排撃する『壇経』も引用している。仙英→仙受→鉞巖（仙雄）という系譜であるため、鉞巖は『伝光録』を重視し、その立場で『正法眼蔵』を見て漢訳したのではなかろうか¹⁷⁾。

1) *Record of the Transmission of Illumination by the Great Ancestor, Zen Master Keizan*, ed. Griffith T. Foulk, 2 vols., 48-49 (Tokyo: The Administrative Headquarters of Sōtō Zen Buddhism (Sōtōshū Shūmichō), 2017-2018). 英訳する際、鉞巖訳を参考にすると Bodiford 氏からご教示いただいた。2) <http://formosanpromenade.blog.jp/archives/79454887.html> (2019年4月1日)。簡潔ながら情報を多く含んでおり、きわめて有益な記事となっている。3) 『正法眼蔵布鼓』の漢訳の特徴については、石井公成「陸鉞巖の『正法眼蔵布鼓』——その漢訳の特質——」（『駒澤大学禅研究所年報』第33号、2021年）。4) 山岸安次郎『洞上高僧月旦』（古香書院、1893年）39-41頁、手島益雄『続名古屋百人物評論』（日本電報通信社名古屋支局、1915年）207-209頁、井上泰岳編『現代仏教家人名辞典』（現代仏家人名辞典刊行会、1917年）620頁下段、海野幸勝『大日本人物名鑑』（ループル社出版部、1921年）234-235頁、川口高風「明治期以降曹洞宗人物誌（五）」（『愛知学院大学論叢』第61号、2014年）149-148頁。5) 横尾賢宗「禪定回復翁信受仙受和尚」（『修養世界』第6巻第1号、1917年1月）。この記事における横尾の肩書きは「曹洞宗大学林教頭」。仙受の弟子で頭角を顕している者は少ないとし、「法嗣の陸師が随一であらう」（45頁下段）と述べている。6) 山岸安次郎『洞上高僧月旦』（古香書院、1893年）40-41頁。7) 石川力山「解説」（曹洞宗選書刊行会編『曹洞宗選書第六巻 教義篇——対外来思想——』同朋舎出版、1981年）。8) 入学年は不明だが、当時の年限は3年であり、明治19年に卒業しているため、この年に入学したと思われる。明治18年11月撮影の14名の学生たちの写真が『駒澤大学百年史』に掲載されており、その14名の姓名一覧中に「岐阜県 陸鉞巖」とある。9) 「以下次号」とあるが、創刊号を筆者が所蔵するのみであり、本新聞は諸大学図書館・国会図書館に所蔵されていない。10) 台湾での陸鉞

巖の活動については、王見川「從龍華教到仏教——光復前台南德化堂の歴史——」（『円光仏学学報』第5期、2000年12月）を初め、台湾の多くの研究書・論文で触れられているが、詳細に論じた単独の論文はない。11) 20歳で随行した井上秀天（1880-1945）が『印度事情』（龍泉堂書局、1903年）でインドでの見聞を報告しているが、「緒言」で「陸鉞巖師に尾し」と記すのみで、鉞巖の言動には触れていない。秀天については、石井公成「日本禪學的近代化與臺灣佛教——以忽滑谷快天與井上秀天為中心——」（『法鼓佛學學報』第27期、2020年12月）。12) 陸鉞巖『西航行脚布鼓』（円通寺専門僧堂、1928年）141頁。13) 来馬琢道「十年前の曹洞宗大学（九）」（『和融誌』153号、1909年4月）。14) 懷契編・陸鉞巖訳著『正法眼蔵随聞記布鼓』（円通寺認可僧堂、1921年5月）末尾添付の「『正法眼蔵随聞記』など、四部漢訳出版の畧理由」2頁。15) 来馬琢道「瀧谷琢宗」（『禪的体验 街頭の仏教』仏教社、1934年。初出は、『仏教』1899年9月号）16) 国内の大学図書館等で鉞巖の漢訳を所蔵しているところはきわめて稀であり、また国会図書館も所蔵しているのは鉞巖の著書の一部にとどまるため、どの程度配布したかは明らかでない。17) 『正法眼蔵』と『伝光録』の違い、および見逃されがちな共通点については、竹内弘道「『伝光録』と『正法眼蔵』」（『宗学研究』第33号、1991年3月）を初めとする竹内氏の一連の論文が論じている。なお、『伝光録』には漢文本があり、それを発見した児玉達童の「伝光録の一異本（漢文本）について」（『駒澤大学研究紀要』第14号、1956年4月）が論じているが、鉞巖の没後のことであり、鉞巖は見えていない。児玉論文については、横山龍頭氏のご教示による。

〈参考文献〉

陸鉞巖 1885「尼僧学校設立論」『東洋宗教新聞』（旃檀舎）1: 12-14. 山岸安次郎 1893「洞上高僧月旦」古香書院。陸鉞巖 1901「印度仏蹟参拝記」『通俗仏教』3(1): 51-53. 井上秀天 1903『印度事情』龍泉堂書局。陸鉞巖 1908『陸禅話』円通寺。来馬琢道 1909「十年前の曹洞宗大学（九）」『和融誌』153: 562. 手島益雄 1915『続名古屋百人人物評論』日本電報通信社名古屋支局。井上泰岳編 1917『現代仏教家人名辞典』現代仏家人名辞典刊行会。横尾賢宗 1917「禅定回復翁信叟仙受和尚」『修養世界』6(1): 45. 懷契編・陸鉞巖訳著 1921『正法眼蔵随聞記布鼓』円通寺認可僧堂。海野幸勝 1921『大日本人物名鑑』ループル社出版部。陸鉞巖 1928『西航行脚布鼓』円通寺専門僧堂。来馬琢道 1934『禪的体验 街頭の仏教』仏教社。児玉達童 1956「伝光録の一異本（漢文本）について」『駒澤大学研究紀要』14: 103-117. 石川力山 1981「解説」曹洞宗選書刊行会編『曹洞宗選書第六巻 教義篇——対外来思想——』同朋舎出版、439-441. 竹内弘道 1991「『伝光録』と『正法眼蔵』」『宗学研究』33: 191-196. 王見川 2000「從龍華教到仏教——光復前台南德化堂の歴史——」『円光仏学学報』5: 251-252. 川口高風 2014「明治期以降曹洞宗人物誌（五）」『愛知学院大学論叢』61(4): 160-147. 石井公成 2020「日本禪學的近代化與臺灣佛教——以忽滑谷快天與井上秀天為中心——」『法鼓佛學學報』27: 1-31. ———— 2021「陸鉞巖の『正法眼蔵布鼓』——その漢訳の特質——」『駒澤大学禅研究所年報』33: 109-126. Foulk, Griffith T. ed. 2017-2018. *Record of the Transmission of Illumination by the Great Ancestor, Zen Master Keizan*. 2 vols. Tokyo: The Administrative Headquarters of Sōtō Zen Buddhism (Sōtōshū Shūmuchi).

〈キーワード〉 瞎道本光、仙英、正法眼蔵却退一字參、曹洞宗大学林、台湾布教師
(駒澤大学名誉教授、文学博士)